

GATE 勝った日本と負けた日本 彼の地にて、斯く戦えり【仮】

イキ過太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲートを通じて世界大戦に勝った日本と現代の日本が交流するお話

現代の日本を「日本」

世界大戦に勝った日本を「大日本」

とします

目次

第一話	1
第二話 日本と日本	4
第三話 コンタクト	6
第四話 共に戦う	9
第五話 共同戦線	12

第一話

【大日本 総理官邸】

「平和じゃのう・・・」

鳥の鳴き声が聞こえるなか、ひとりの老人が茶を啜りながら、眼下に広がる町を見てそう漏らす

「はい、我々が世界制覇を成し遂げた時から一度も戦争は起こっておりません」

総理大臣の声に答えたのは、護衛の憲兵であった

「ふおっふおっ、まだ世界制覇の実感がわかないがな」

「私もであります」

意見が一致しふたりはキョトンとした顔で顔を見合せ、高らかに笑った

「ハハハ!!・・・ですが総理、そうも言ってもらえません」

「わかっておる、最近の失踪事件のことであろう」

実は最近、日本国に失踪事件が相次いでいるのだ

計画的犯行と思いきや拐われる人種は様々で総日本警察も足取りが掴めていない

そんな中、一つの足音が静寂を破った、足音からして焦っているのが見て取れる

バンツ!!

扉が大きなおとを立てて開けられる

「総理!!非常事態です!!」

「どうした!?!」

「銀座にて謎の軍団が出現!!付近の住民に危害を加えているとの事!!!」

「何っ!?!?!」

この後、銀座に出現した謎の軍隊は、日本空軍と日本陸軍によって撃滅された

そして二日後

「皆、突然あつまってもらってすまない」

重々しい雰囲気の中、総理が口をひらく

「集まってもらったのは他でもない、二日前に起きた銀座事件のことだ」

その後、銀座で起きた襲撃は色んなマスコミが大々的に取り上げ、日本国民や海外にも知られる事となった

もはや世界中で銀座事件の事を知らない物はいない

「この事について皆からの報告をたのむ」

「では私から良いでしょうか」

手を挙げたのは警察庁長官、その顔はやや青ざめている

「頼む」

「分かりました・・・銀座付近の被害説明をします、銀座付近にいた一般人二十名死亡、三十名重傷、約百名が軽傷です、また撃退に当たった警察官が二十五名死亡しました」

「・・・クソ野郎どもが」

誰かがポツリと言う、尊い命を奪われたことに腹を立てての事だろう

「それに道路の真ん中に門が出来、道路が使えなくなっています」

「門?」

「それについては私から」

一人の男が席を立った、国防長官である

この男は若いにも関わらず、功績を挙げ続け、若くして国防長官になった

「門、というのはあの集団の出入り口でございませう」

「ということは一!」

「はい、あの集団は門から我が国へ侵略したのです、軍は門の先を『特
地』と呼称することにしました」

私達はこれを立派な侵略行為と考え、陸軍と空軍を特地へ派遣する
ことにいたしました、準備はすでに完了しているため、総理のゴーサ
インがあればすぐにでも特地へ出発できます」

「あいわかった、軍の派遣を許可する」

こうして特地に日本軍が派遣される事になった

第二話 日本と日本

「帝国軍見つかんねえな」

「そんなもんだろ、デルター」

現在、大日本空軍所属の三機のジェット戦闘機がファルマート大陸の空を飛行していた

この航空部隊の任務は門周辺の偵察、必要あらば爆撃もすると言うものだ

空からの目はとても信頼できる、幸い敵の軍隊の装備は中世レベルとの情報があり、撃墜される心配は皆無である、それでも何かがあるか分からないため、大日本空軍は『型落ち?』である23式ステルス戦闘爆撃機を特地に派遣する事を決めた

「さて、今日の所は帰るか」

「帰ろーぜー」

「デルター1、デルター3、少しは緊張感を持つてだな・・・」

すると猛禽の眼に丘ーーーーー帝国軍から徴収した地図によるとアルヌスの丘と言うらしいーーーーーが移った

その丘にはもう一つの門があり、明らかに近代化された軍隊が進駐していた、あの場所は我が大日本軍の基地にも近い、もしあの軍隊に攻め込まれたら厄介だ

「おい!見たかあれ!」

「近代化された軍隊だな、少なくとも帝国じゃないな」

「対空装甲車もあるな・・・無線で所属を答えさせよう、デルター3頼む」
「分かった」

頼まれたデルター3は無線機を付けて回線をオープンにして眼下の軍隊へロシア語、英語、日本語の三ヶ国語で警告を行った

『こちら大日本空軍特別偵察隊である、そちらの所属を答えろ、3分以内に答えなければ爆撃する』

陸上自衛隊はパニックに陥っていた

なぜか特地に航空機が飛んでいた事、その航空機がアメリカしか所持していないはずのF22である事、そしてその航空機に日の丸が描かれている事、その航空機から警告が来た事、色々な事が重なり大パニックになった

「爆撃なんて勘弁だ!!」

「どつちを狙えば良いんだ!!」

もう一つの事が自衛隊の混乱を加速させていた

今、自衛隊の前には銀座に攻めこんだ帝国軍がいる、そして空には謎の日本軍

挟み撃ちの状態である

しかし自衛隊に奇跡が起きた

「三分経っても応答なしか・・・仕方ない、爆撃するか」

「いやまて、あの軍隊何かと戦ってるぞ」

デルター1が爆撃する前に

軍隊の進駐地に近づいたデルター2が戦闘を捉えた

「何とだよ」

デルター3が呟く、その質問もごもつともだ

三人はあの軍隊と戦っている集団に目を凝らす

「「帝国軍だ!!」」

瞬間、三人の中に怒りが灯る、何せ帝国軍は一般人を殺したクソ野郎共だからだ、許す訳がない

「爆撃目標変更!!あのクソツタレどもの頭上に爆弾を落としてやれ!!」

デルター1が怒気を孕んだ声で叫んで帝国軍に向かう

「おう!」

第三話 コンタクト

伊丹耀司二尉率いる第三偵察隊はファルマート大陸を車両で走っていた

ファルマート大陸の空は蒼く、隊員達の好奇心を掻き立てていた
「いやぁー!!空が蒼いねえー!!」

「こんなの北海道にもあるっすよ、せつかく異世界と思ったのにガツカリっす」

他愛もない話を続けていると、栗原曹長が口を開く

「ファンタジーもいいがもう一つ俺達は気にしなくちゃならん問題がある」

「日本軍?」

「そうです、伊丹二尉」

日本軍、今アルヌスに進駐している自衛官で知らないものはいない話題だ

「大体おかしいでしょ!!」

「どうした倉田」

「あの日の丸が書いてあった機体、ありやF22ですよ!?アメリカ合衆国の航空機でアメリカ以外持ってませんよ!?!?!しかも爆撃されそうになったし!!」

息継ぎもせず超早口で説明する倉田に対し伊丹二尉が宥めるような口調で話す

「日本軍の目的が帝国軍で良かったな、でなきや今頃門ごと爆撃されてた、しかし日本軍がF22は驚きだよな」

「でも！容赦の欠片もありませんでしたよ!?!」

「俺達もあと少して帝国軍と戦ってたんだ今さら容赦とか言ってる場合じゃないだろ」

と言いかくびしようとした伊丹の目にある建物が映る

「おいあれ!!」

伊丹が指差したさきには

「基地!?!あんなでっかい!」

まさに城塞と言わなければならない基地が建っていた

「おやっさん！あれって！」

「間違いなく日本軍の基地だろうな、こんな短期間であんな強固な基地を作れるとは、あっちの技術力は自衛隊以上だろう、どうしますか？伊丹二尉」

「接触を計ってみよう」

伊丹は考えた、目の前にいる日本軍、F22を独自で作れるほどの技術力、資源力、経済力、どれもが自衛隊を上回っている、もしも敵に回してしまつたら特遣部隊は易々と消されるだろう

ならばここで味方に付ければ大いなる戦力になる、ここで接触するのも悪くない

「栗林ちゃんはどう思う？」

「私も接触に賛成です、この特地でもし味方にできれば頼もしいかと」
「よし決まりだな！」

第三偵察隊は日本軍の基地へハンドルを切った

「もう少しで着くぞ、念のために安全装置を外そう」

伊丹達は基地へもう少しの所に近づいていた、ここからは戦闘もあり得るため伊丹は他の隊員に銃のセーフティを外すよう命令した

『おい!!そこの軍用車達!!今すぐ引き返せ、さもなければ容赦なく攻撃する!!』

警告と同時に基地のなかから戦車、歩兵、軍用ヘリが続々と出てくる、その目的はもちろん伊丹達である

「流石の警備ですね・・・伊丹二尉お願いしますよ」
「分かってる」

押し潰されそうなプレッシャーのなか、伊丹は拡声器にてを掛ける『こ、こちら日本国陸上自衛隊！特遣方面派遣部隊第三偵察隊！そちらの司令官にお会いしたい!!』

『何を言っている!!今すぐ引き返・・・げ、元帥!?!』

突然、門番が慌てる

「どうしたんでしょう、随分慌てているようですが」

『第三偵察隊、許可する』

それからはトントン拍子で進んだ

粘り強い交渉が必要かと思っただがそんなことはなく、急に許可が出された

「君らが陸上自衛隊かね？」

日本兵に連れられた先には優しそうなおじさんがいた、コーヒーを片手に猫を抱えながら山奥に隠居してそうな見た目である

だが伊丹には奥底に眠る闘気を理解していた、これは何度も戦場をくぐり抜けて来た歴戦だと言うことが

「はっ!! 貴方が日本軍の司令官でしょうか!？」

「うむ、私が大日本特派遣軍総司令、大鷹五十六、階級は元帥だ」

「はっ!!」

隊員達の体が緊張で硬くなる、目の前にいるのは元帥、一番上の階級である

「ほっほっほ、そう硬くならないで、この世界では協力した方がお互いのためだろう? ほらコーヒーも用意した」

大鷹元帥は微笑みながらコーヒーをならべだした

「ありがとうございます!!」

「さて本題だが君たちを指揮している者は誰かね?」

「わ、私です!」

「名前はなんと言うんだい?」

「伊丹耀司です!」

「じゃあ、伊丹君」

「はい?」

「君らの司令官に会わせてくれないかい?」

第四話 共に戦う

大日本軍特遣隊指揮官の大鷹五十六と陸上自衛隊特地方方面派遣部隊指揮官の狭間浩一郎の会談は厳重な警備下のもと行われた

「以前は我らの航空隊が迷惑をお掛けしました」

「いえいえ、問題ありませんよ」

狭間はプレッシャーと不安に押しつぶされそうになっていた、狭間の返答次第では日本軍が敵に回りアルヌスに居る隊員が危険に晒されるからだ

ここで狭間は思い切った事を聞いてみた

「いやはや、まさかF22を運用していらしたとは驚きました」

「F22とは？」

「そちらの航空隊が運用していた・・・」

「ああ！あれはF22という名前ではなく23式ステルス戦闘爆撃機ですよ、もう型落ちで退役間近のおじいちゃんですがね」

これではつきりした、日本軍、いや大日本はF22を独自開発出来る程の技術力を持っている、しかもそのF22が退役間近だと言う、もしかすると大日本国はアメリカ合衆国以上の超大国かもしれない、なんせ陸上自衛隊が誇る10式戦車と同じくらいの戦車ですらおんぼろと言われている、本島にはどんな化け物が潜んでいるのだろうか、考えるだけでも恐ろしい

「おお、あなた方の技術力には驚かされます」

それはお世辞ではなく心からの言葉だった

「さて、要件ですが」

「何でしょう？」

狭間は思わず身構える、どんな要求が来るのか見当もつかないからだ

「私達の大日本軍とそちらの陸上自衛隊で協力関係を結びませんか？」

「と、いいいますと？」

「大日本国は将来、日本国と友好を結びたいと考えております、その友

好計画の第一歩として私たち同士が協力しましょう」

「は、はあ……」

「協力関係を結んだ暁にはいついかなる時でも自衛隊の味方をし、もしお望みなら私達の兵器を差し上げましょう、解析いただいても結構です」

「ほ、本当ですか!?!」

大日本国軍が提案したのは自衛隊側に有利で、とても良い条件だった

「ただし条件があります」

【自衛隊 アルヌス駐屯地】

「で、日本軍の一部がアルヌスに来たって訳か」

伊丹は日本軍の輸送機を見上げながら、二日前狭間陸将直々に全自衛官が集められ日本軍について説明されたことを思い出す

回りにも日本軍を一目見ようとたくさんの自衛官が集まっている

「二尉、日本軍ではなく、大日本軍?です」

黒川が訂正に入る

「そっだったな……いやー、アメリカに勝った日本かあ、創作の中だけと思っただけどまさか本当にあるとはな」

伊丹もその手の話は嫌いではなかった、そもそもオタクであるし、そういう書物は腐る程もっている

だが怪物のような工業力を持っているアメリカにどうやって勝ったか、理由を聞いてみたいものだ

「私も信じられませんよ、しかし大日本軍の装備はそのどれもが私達の装備を上回ってます」

「すごいよな、あ、戦闘機」

伊丹達の上空をF22スーパーアチラでは23式ステルス戦闘爆撃機と言わらしいスーパーが爆音を立てて通過し大日本軍が一晩に

して作った滑走路に降り立つ

回りの自衛官は興奮しながら戦闘機を見ている、アメリカにしか無いはずのF22を見れるのだから当然だ

突然、大日本軍の基地から警報がなる

「なな、なんだ!?!」

大日本軍の兵士が伊丹達の所へ走りよる

「どうしたんですか!?!」

「我が軍の哨戒機が帝国軍を発見しました!!ここに向かっていきます!!自衛隊の皆さんも準備を!!」

第五話 共同戦線

「総員、戦闘配置!!」

警報が鳴り、自衛隊、大日本軍共々慌ただしく動いていた

大日本軍の偵察機がアルヌスに向かっている帝国軍を見つけたからだ

「竜も居ると聞いたぞ?! 防空は!？」

「エースパイロットのデルタ隊がやる、安心しろ!」

伊丹達は大日本軍の強さを再確認すると共に

軍人同士の信頼が高い事が分かった、背中を守ってくれる人が居るのは良いものだ、これが大日本軍の強さの秘訣だろう

噂では大日本側の門の近くにいた帝国軍をたった数十分分で全滅させたらしい

「自衛隊の皆さん! あと二分でコンタクトです!」

自衛隊の陣地に一人の軍刀を携えた若者が帝国軍の情報と共に入ってきた

「了解しました! あなたは?」

伊丹が疑問を投げ掛ける、入ってきた軍人は若く、一般人(体は軍人だが)に見える

「大日本軍特遣軍第一師団指揮官、階級は中将、船坂弘と申します、この戦必ず勝利しましょう!」

そう言い船坂中将は自分の陣地に戻っていった

「あんなに若いのに中将なのか・・・」

伊丹もこの前、異例の昇進で二尉になったばかりである

「それだけ優秀なのでしょう」

「先輩も負けてられないですね」

「そうだな」

自衛隊は数少ない実践の緊張に震え、大日本軍は同胞を殺した帝国軍への怒りに震え、時間が過ぎていった

|| 二分後 ||

「帝国軍はまだか？」

「あと三十秒です」

『コンタクトオオ!!』

千里に渡るような大声と共に船坂弘指揮官は軍刀を引き抜き、帝国軍へ向けた

『我が大日本軍の威力を知らしめるのだ!!各員一層奮励努力せよ!!撃ち方始めえー!!!』

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

その直後、銃声と爆音がアルヌスの丘を支配した

ミシン縫いのような弾幕が帝国軍を遅い、帝国軍の軍人は次々と血煙と化して行った

「・・・凄いい!!」

伊丹は感動する、明らかに自衛隊への攻撃の人員の三倍以上が大日本軍へ向けられているが、大日本軍は難なく捌いている

だがその時、急に大日本軍の弾幕が途切れた。

何事かと大日本軍の陣地を見ると複数人の何かをからった日本兵が居た。

その兵士は皆、『大日本陸軍』と書いてあるハチマキを付けていた。

「火炎放射!!よいい、てえー!!!」

「ギャアアアア!!」

「熱いい!!助けてくれえ!!」

大日本軍が放射したのは火炎放射機だった、あの軍人達がからつていたのは大方火炎放射機の燃料タンクだろう

「「おお・・・」」

自衛隊は顔を青くしていた、『火炎放射機』・・・戦争において非人道的だと規制が議論されている焼夷兵器の一種である。

というか特定通常兵器使用禁止規制条約において使用を禁止されている。

ここは異世界であるため、使っても諸外国の信用を無くすことはないだろうが、まさか使うとは思っても見なかった。

「左翼敵殺到!!」

自衛官の一人が叫ぶ、左側からとんでもない人数が攻めてきたのだ、人が人の盾となりジリジリと距離を詰められている

自衛隊は己を恥じた、隊員のほとんどが大日本軍に見惚れ戦闘の手を緩めてしまったのだ。

その時だった、どこからかロケットが飛んできたのだ

その攻撃により、自衛隊側の敵は全て全滅した

「どこからの攻撃だ?」

伊丹が近くの隊員に質問する

「あの人です!」

隊員が指を指す、そこにいたのはとんでもない高身長で筋骨隆々な男がロケットランチャーや対物ライフルをからい、さらには機関銃を何個も持っていた、とても人間とは思えない力だ。

「だ、誰だ!!」

自衛隊員の一人がその男に銃を向ける

「ま、まて撃つな!」

伊丹が静止する、がその自衛隊員は聞かなかった。

いや、おそらく慣れない実戦での興奮と恐怖で聞こえてないのだろう。慌てて近くにいた隊員が押さえる。

その時、大日本軍もこちらの事を把握したのだろう、皆こちらを向いている。

だがどうも様子がおかしい、皆慌てて居るようだった。

大日本軍の特地派遣軍第1師団の中から、船坂弘指揮官が出てきた、船坂は謎の男に駆け寄った。

「いつでも撃てるようにしておけ」

伊丹は隊員に命令する

「おかしいよ、船坂弘さんが下手にでてるっす」

「確かに・・・誰だろう?」

話し終わったのか、弘指揮官が自衛隊の方へ駆け寄って来た

「大丈夫でしたか？誰なんです？」

「えーっと、そちらの国にも天皇陛下下って居ますよね？」

「はい、もちろん……って、まさか!？」

「そのまさかです、あのお方は我ら大日本国の天皇陛下です」

その情報を聞いた自衛官達は顔を見合わせる、そして見合わせるこ
と数十秒……

『『『えええええええーっっっ!!??』』』

自衛官達のすつとんきような声がある!ヌスの丘に響いた

その間その天皇陛下は物珍しそうに目を輝かせながら特地の植物
を採集していた